



「不遜な定説」この足で踏んづけた 歴史のほころび 掘り出した神戸

城山三郎

後ろから迫る六甲山系と带状の都会。ましてダイヤをちりばめたような夜景が加わると「そんな眺めはそうあるもんじゃない」と。神戸を語る城山三郎さんの言葉には力がこもる。「アパートでも借りようかと思った」ほど、長期取材したことがあるからだ。
昭和三十六年夏。小わきにメモ用のノートと地図を抱え、城山さんは、ある事件の生き証人を次々と探し歩いていた。

△鼠はこう語る。「鈴木が潔白であることは、眼のある人なら知って居る。鈴木は感謝されても怨まれることはない。人を信じて疑わない無邪気さはまるで子供のようなだ。激動する社会に対して、動物的カンとひらめきだけで仕事を続けた直吉によって、鈴木商店は興り、そして滅んだのだろう。鈴木崩壊の際にひとつのエピソードがある。会社整理が大詰めを迎えた時、銀行は鈴木から直吉の退陣を要求した。それをのめば鈴木は救われる、という事態に直面しても社長の二代目岩次郎は、鈴木と直吉の運命を共にすることにした。直吉の忠誠心に報いると同時に、主家としての鈴木への誇りお保つ。その選択はまさに「滅びの美学」そのものだ。中央区海岸通から栄町通、東川崎町へ、再び海岸通へ。鈴木商店は成長する度に店の場所を変えたが、跡にその繁栄を示す遺物は一切ない。
昭和三十四年、鈴木OBで結成された「辰巳会」。百十九人いる会員の平均年齢は八十八歳になり、直吉を直接知る人も少なくなった。

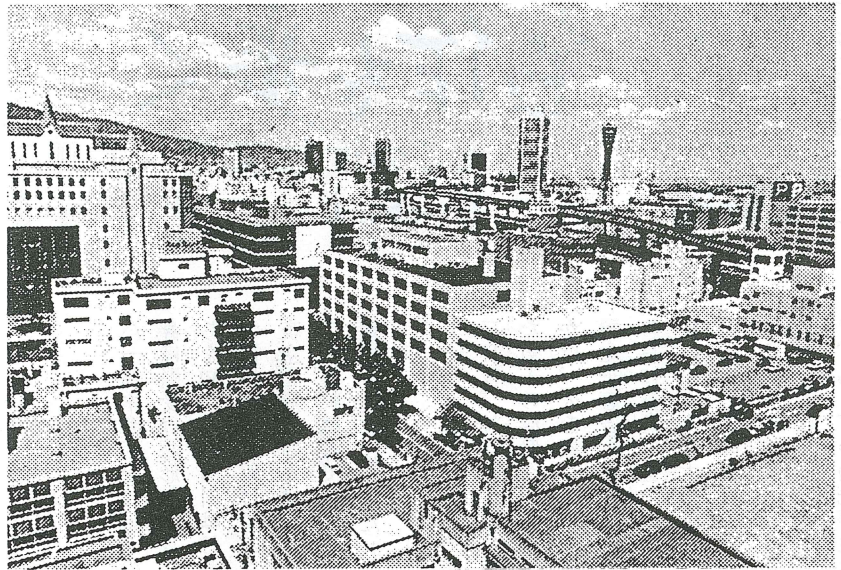
△歴史の教科書では悪の権化のように糾弾されているが、本当に買い占めをやったのか。その根拠は何か。金子が周辺の人々に慕われるのはなぜか。金子という人間のなぞに迫ってみたい。歴史の洗い直しが始まった。
中央区楠町。まだ市電の走っていた大通りでタクシーを降りると、城山さんは元会社社員宅を訪ねた。大学の歴史学研究会が発行した小論文集の中で「米は鈴木商店が買い占めていた。青田買いまでして」と語る証言者三人のうちの一人だ。この小論文はその後、本格的な米騒動研究書の下敷きになっていった。
だが、証言の根拠をただすと「うわさ」か「新聞記事」だった。元米店主や元神戸証券取引所理事長らの証言も信じよう性に欠け、都合よく予断によって圧縮されていた。「学生の集めた情報も、学者が発表すれば権威ある歴史的証拠になる。歴史というのは信用できないものだと思いませんか」
同商店の生き残りの人たちが確証もなく買い占めを執ように攻撃

応接間には小磯良平画伯による直吉の肖像画がひととき目立つ。孫の貴答恵子さん(五九)は「物静かで笑い声ひとつたてない人。自宅の狭い風呂が嫌いで毎日有馬温泉に出かけていたのを覚えています」と祖父像を語る。

鈴木商店の一族郎党が眠る、神

戸・北野町西端の高台にある追谷墓地。鈴木家の墓に寄り添うように金子家の墓が建つ。鮮やかな新緑越しに見えるのは、大小の船が行き交う神戸港。世界市場を相手に闘った直吉は、今も海の向こう側を見つめているはずだ。(竹内 章記者)

繁栄する遺物ない巨大商社



ビルが立ち並び、栄町通りから市電が消え、街は姿を変えた。現在の神戸地方貯金局(中央の6階建て)あたりに鈴木商店があった=神戸市中央区栄町通

表題の△鼠は金子の俳号「白鼠」に由来する。福の神の大黒さんの使である白鼠は、住む家に繁

栄をもたらすという。直吉の表現にこれ以上ふさわしい言葉はない。度重なる新聞の攻撃に対して、

△鼠はこう語る。「鈴木が潔白であることは、眼のある人なら知って居る。鈴木は感謝されても怨まれることはない。人を信じて疑わない無邪気さはまるで子供のようなだ。激動する社会に対して、動物的カンとひらめきだけで仕事を続けた直吉によって、鈴木商店は興り、そして滅んだのだろう。鈴木崩壊の際にひとつのエピソードがある。会社整理が大詰めを迎えた時、銀行は鈴木から直吉の退陣を要求した。それをのめば鈴木は救われる、という事態に直面しても社長の二代目岩次郎は、鈴木と直吉の運命を共にすることにした。直吉の忠誠心に報いると同時に、主家としての鈴木への誇りお保つ。その選択はまさに「滅びの美学」そのものだ。中央区海岸通から栄町通、東川崎町へ、再び海岸通へ。鈴木商店は成長する度に店の場所を変えたが、跡にその繁栄を示す遺物は一切ない。
昭和三十四年、鈴木OBで結成された「辰巳会」。百十九人いる会員の平均年齢は八十八歳になり、直吉を直接知る人も少なくなった。



落ち着いた雰囲気洋間。当時、直吉はこの部屋で来客をもてなしたという。神戸市東灘区御影中町

的な生涯にひかれていく。私利私欲を持たない金子は、国益志向という経営理念と主家への揺るぎな

き忠誠心のもと、事業の拡張のみを生きがいとして鈴木を巨大商社に育て上げた。

それでも直吉死去五十年目にあたる今年には、追悼の会に全国から九十二人が集まった。「金子さんは父の自慢の種でした」。鈴木商店マンの父を持った息子から、会合の度に今でもこんな声が寄せられる。

直吉が晩年を過ごした家は、今でも神戸市東灘区の阪神御影駅近くにある。くすんだ色の洋館で、

辰巳会平成4年度決算書

自：平成3年4月1日
至：平成5年3月31日

収入の部	金額	支出の部	金額
前期繰越	円	支出	円
現金	140,901	大会・例会費	1,176,877
預金	1,552,229	たつみ誌(1回)	438,368
未収入金	2,024,000	支部経費	450,000
計	3,717,130	慶弔費	199,824
		印刷費	16,340
		通信費	210,486
		消耗品費	11,480
		旅費交通費	4,320
		雑費	196,234
		計	2,703,929
収入		次期繰越	
大口広告料・会費	2,200,000	現金	67,012
小口広告料・会費	340,000	預金	3,130,103
預金利息	9,914	未収入金	1,310,000
寄付金	220,000	計	4,507,115
大会・例会々費	724,000		
計	3,493,914		
合計	7,211,044	合計	7,211,044

した新聞社の幹部など、三年がかりで取材した人は約三百人。すまし顔でのさばっていた(不遜(ふそん)な歴史)のほころびを足で捕まえ、書き上げた小説が「鼠」鈴木商店焼き打ち事件」。昭和三十九年秋から文芸誌に連載される。

だが文壇から無視された。「当時ノンフィクションは文芸批評の対象とされなかった。でも評価はどうでもよい。読者が支持してくれたし、多分にノンフィクション的になってきた今の文学の先取りをしたと思っっているから」

城山さんの足跡をたどり、晩秋の神戸を歩いた。同商店の榮華を残すものはないが、城山さんから取材を受けた人に会えた。鈴木商店直系の「太陽鋳工」会長、鈴木治雄さん(七五)ヨネの孫だ。

「城山さんは自分の足で調べておられた。あの作品が出るまで鈴木商店の汚名返上の記事はなく、城山さんの『鼠』で我々の冤罪(えんざい)が晴れたんです」

神戸は「足で書く作家」城山さんにとって、その後の作家活動の

城山三郎
本名は杉浦英一。一九二七年(昭和二年)、名古屋市の商家に生まれる。五二年一橋大学卒業後、愛知学芸大で景気論を講義するかたわら創作活動を始める。外国駐在の商社マンの虚無的な生活を描いた「輸出」(五七年)で文学界新人賞を、総会屋を通じて経済機構の病巣をえぐった「総会屋錦城」(五九年)で直木賞を受賞する。白木屋乗っ取り事件をヒントに「乗取り」(六〇年)を、足尾銅山鋳毒事件の田中正造をモデルに「辛酸」(六一年)などで、経済小説の開拓者となる。他に「雄気堂々」「落日燃ゆ」など多数。その作品群には組織と人間性の問題が貫かれている。

原点になっているという。
平野 英俊

